

# 西国ドライブ巡拝記

## 西国札所(第十番～第二十一番)

(pdf Version)

平成 12 年 1 2 月 2 6 日  
平成 15 年 2 月 1 日 (pdf 化)  
阿部敏雄(敏翁)

この旅行記は、平成 8 年(1996) 3 月 1 2 日から 1 4 日まで、西国三十三観音霊場第十番から二十一番までドライブ巡礼した時のもので、パソコン通信 PC-VAN の SIG 「NTRAVEL」に掲載した文章を主体にしたものに画像を加えて HTML 版に纏めたものです。

本巡拝記の巡拝自体は、「熊野・西国ドライブ巡拝記」に半年強先立つものですが、西国三十三観音の順番としては後に続くものです。それで上記「熊野・西国・・・」の後ろに置くことにしました。尚、「敏翁」とは、小生のニックネームです。

## 目次

(見たいところをクリックすればそこにジャンプします)

- I. はじめに 1
- II. 三室戸寺(第十番) 2
- III. 上醍醐寺(第十一番) 3
- IV. 岩間寺(第十二番) 4
- V. 石山寺(第十三番) 5
- VI. 三井寺(第十四番) 6
- VII. 元慶寺(番外) 7
- VIII. 今熊野(第十五番)・鳥戸野陵 8
- IX. 善峰寺(第二十番) 9
- X. 穴太寺(第二十一番) 10

## 西国ドライブ巡拝記(1)

敏翁

### I. はじめに

四国八十八カ所、板東三十三観音(4寺未拝)、秩父三十四観音を車でまわり、去年はサンチャゴ・デ・コンポステーラ(スペイン)ドライブ巡礼を済ませた私ですが、西国三十三観音(京都、奈良の観光で回ったそれに対応するお寺はいくつかありますが)が残っていました。

国内の上記三巡礼路と比べたとき、「西国」の特徴は日本の歴史の表舞台の主演達との深い関わり方にある様に思われます。

その観点から見ると、私の読んだ関係する本の中では、**杉本苑子** 「西国巡拝記」 大法輪閣 昭和 4 1 年

が、私の関心に一番ぴったり来るようです。それで、この本を持参して回ろうと考えていました。（この他に、西国札所会・編「西国三十三所観音巡礼」 朱鷺書房 を持参）

またまた、徳山に仕事があり、その帰りに二日ばかり余裕を作ることが出来たので、京都を起点にして第十番から第二十一番まで（京都市内の十六～十九番を除く）をレンタカーで回りました。

これは、そのときの記録で、題は上記書籍に因んでいます。

具体的な、日程が決まってから、行きは飛行機で宇部へ飛び仕事の後、徳山からレール&レンタカーを使うことにしました。

京都には夜着くことになるので、まず駅の近くにある安宿を「民宿ガイド」で探し電話しましたが、たいいていのところは既にいっぱい、ようやく素泊まり専門の「みわや」（東本願寺前、駅から徒歩5分）の予約が出来ました。

出発の三日前に、神奈川県立図書館で上記書籍を借用しました。

## 平成八年 三月十二日（火）夜

新幹線で京都到着。京都の詳細地図を求める。（市内1／一万、周辺1／1.8万）。これ以外に京都・大津1／10万の地図を持参。

## 三月十三日（水）

朝、振動数の低い体にしみ入るような鐘の音で目が覚める。東本願寺の鐘か？聞いているとこれからお寺参りをする気分だんだんってくる。

先ず京都駅前の観光案内所を訪ねる。目的は、今回の計画の中の第十一番上醍醐寺は、車による接近を拒否していると言う意味では、上記四国、坂東、秩父及び西国中一番きついで、足弱の者では一日がかりとも言われているところなのです。

案内書などには、下から登ることしか書いて有りませんが、もっと簡単にアクセス出来る手段が無いか尋ねる為でした。

実は私は、昔から山登りが大嫌いなのです。昔戦時中、中学生の頃マラソンや行軍で真っ先にへばる「虚弱児童」だった私です。

と言うのも、地図を調べていると、山頂の開山堂のそばを「京都国際CC」への取り付け道路が通っているのを見つけたからです。

しかし、案内嬢はにこにこしながら、下から登るしか道はありませんと言うだけでした。（これが公式見解）

しつこい私は、諦めず次に駅レンタカーで、手続きをしながら又聞いてみました。すると、そばに居た年輩の係員が、京滋バイパスの笠取ICから行けるらしい、詳細は近くで聞いてほしいとのこと。

## II. 三室戸寺(第十番)

レンタカー（カローラ2）を借り、国道1号線を東へ走り、山科大塚で右折<35>号線に入る。この道は、醍醐寺の下の部分、三宝院の前を通る筈で、そこで車を止め、五重塔などを訪ねてから山上の部分は裏からアクセスしようと思ったのですが、<35>にはバイパスがあり、いつのまにかそちらを通過してしまい、結局「下の部分」は訪れじまいになってしまいました。

そのまま、宇治に入り、【第十番 明星山三室戸寺】に着く。



寺で頂いた資料の表紙の写真では、本堂の前は蓮の花で一杯になっている。この蓮は鉢植えで、今は空の鉢が一面に並んでいるだけである。

本堂、三重の塔と回る。そばに「浮舟之古蹟」と掘った碑がある(上右図)。このあたりは源氏物語宇治十帳の舞台である。もちろん後世の付会であるが、気のせいか同類のもの(熱海の「お宮の松」や神田明神の「銭形平次」の碑など)に比べて周りの雰囲気も何やら奥ゆかしく感じられる。



納経帳に朱印を戴いた後、上醍醐への道を尋ねる。

寺の人は、言いにくそうに、聞かなかった事にして貰いたい、起こったこと的一切(車のガラスを割られる等)に責任は無い事をくどく念を押した後、前述の笠取ICからのゴルフ場への取り付け道路で、徒歩20分程度のところ

迄行ける事、標識は無いがタクシーが停まっているから解る事を教えてくれた。

五千坪の大庭園がある。季節はずれであったが、しばらく散策する。石庭もあるが、より後代の奇を衿ったような所の少しもない穏やかなものである。(上図)

### Ⅲ. 上醍醐寺(第十一番)

宇治東ICから京滋バイパスに入り、そこから5.1kmの笠取ICで降りる。そこにはちゃんと、左折上醍醐寺迄5kmとの標識が出ていた。5km強走ると、タクシー等数台が停まっていた。そこらいきなり、30度もあるうか、険しい山道(丸太で段の角を補強)が登っている。

ちょうど、中年の女性2人が杖を付き、息をはずませながら降りてきた。30分ぐらいかかるとの事。タクシーの運転手風情の人が私の体型を見ながら(私の体重は80kg)40分見た方が良く、それでも下からならあなたなら2時間はかかると言う。登り口に置いて有った杖の中から良さそうなものを手に取り、登り始める。

道は、昨日(?)の雨でかなりぬかるんでいた。

しばらく行くと、看板があり、『この道は「裏参道」ではなく、この道の利用は、ゴルフ場や付近の住民に迷惑

をかけているので、下からの正規の参道を利用して貰いたい』とあった。

靴とズボンの裾を泥だらけにしつつ、25分程度で開山堂に着く。そばに五大堂、如意輪堂がある。想像したよりは容易にたどり着くことが出来た。(近年こっているエアロビスクの成果か?)

そこから5分ほど下ったところに本堂がある。



【**第十一番 深雪山 上醍醐寺**】の本堂(准胝堂)である。(左図)

ここからは、大分下の方だが、慶長三年、豊太閤の「醍醐の花見」の場がある。そのときの太閤の歌

「あらためて、名をかえて見ん**深雪山**  
(ミユキヤマ) うずもる花もあらわれにけり」

によって、以後山号が「深雪山」となった。

醍醐寺のいわれは、開山の理源大師が、はじめてこの山に登られたとき、横尾明

神の化身である老翁が泉のわき水を呑み、「ああ、醍醐味なるなか」といい、当地に伽藍の建立をすすめた事による。

本堂で納経帳に朱印を戴いた後、さらに2~30m下でこの霊水を頂こうと聞いてみると、現在は水は止めてあるとの事。こんな山中でも環境の状況は変わってしまっているのだろう。

下りは、20分ほどだった。



#### IV. 岩間寺(第十二番)

再び、京滋バイパスに戻り南郷ICから入り、4.9km走り、石山ICで降りる。

そこから【**第十二番 岩間山 正法寺 (通称・岩間寺)**】(上左図)まではほぼ一本道。

ここは、開山泰澄大師が、養老六年諸国遍歴中この付近で日が暮れ、桂の大樹の下で仮寝をしていると、真夜中に桂の幹の中からかすかに「千手陀羅尼真言」をとる声がきこえ、翌朝村人とともに霊木を切り倒し、彫り上げたのが、千手観音像(現存せず)であり、岩間寺の起こりといわれている。

本堂の前に、そのときの桂と称するものの切り株が、注連をめぐらして残っていると杉本さんの本にあり、その

写真も載っているのだが、今はなく、由来を記した碑と桂の若木が二本植えてあるのみであった。

本堂横に、石に囲まれた小さな池（直径5m位か）があり、これが芭蕉が

「古池や 蛙飛び込む 水の音」の句を詠んだ池なのだそうである。（前頁右図）

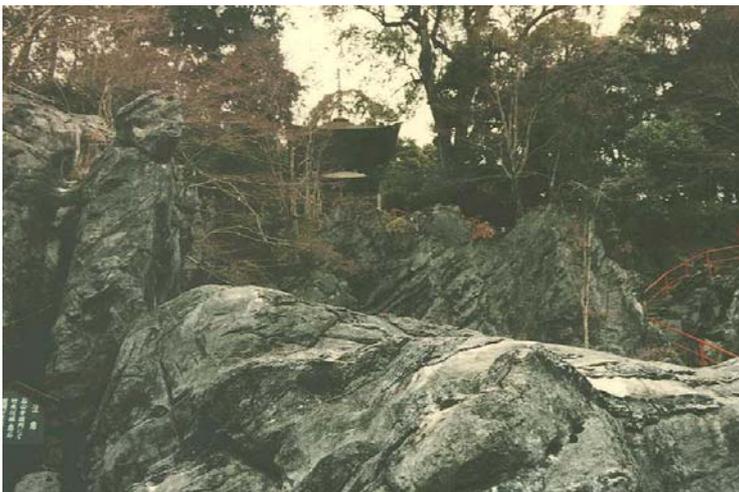
しかし、「本家」を称するところは全国あちこちにあるらしい。

ここの池も私の感じでは、丁度織り悪しく周りが工事中の事もあって句の幽玄なイメージには合わないものであった。

もともと、昔はこのあたりも山深いところだったのであろうが。

信徒会館があり、宿泊以外に食事もできそうな様子。考えてみると今朝から何も食べていない。しかし会館に入っておばさんに聞いてみると、今日は休みだという。急に空腹を耐え難く感じ、車で町迄降りて鍋焼きうどんにする。

## V. 石山寺(第十三番)



その店で、道を聞き、

**【第十三番 石光山 石山寺】**（上左図）の大駐車場迄車を走らせる。

大駐車場の周りは、土産物屋、食堂（名物はシジミ飯）が沢山、観光地になっている。さきほどもう少し我慢してここでシジミ飯にするべきだったと少し後悔する。

山門（重文）をくぐり、石段を登ると突然、大硃灰石群（天然記念物）が現れる。石山寺の名の由縁である。その横に本堂（国宝）がある。その外陣のひとす

みに「源氏の間」とよぶ参籠所がついている。寛弘元年8月15夜、紫式部が参籠し、源氏物語を綴ったと伝えられるところである。

紫式部と侍女を模した人形が二体そこに置かれているが、杉本さんに言わせると、国宝建造物の品位をおとすと

手厳しい。

そこから、少し石段を登ると宝篋印塔（＝紫式部供養塔）と芭蕉の句碑がある。

「あけぼのは まだ紫に ほととぎす」

この「紫」は紫式部に掛けているとの説明があったが、そうであろうか？

近江八景の一つ「石山の秋月」の雰囲気を多少とも味わうため「月見亭」に行ってみる。月は、真向かいの岡から登るらしい。月でも見えれば素晴らしいのかも知れないが、昼間曇天下の景色は何の変哲も無い。

## VI. 三井寺(第十四番)



琵琶湖西岸を約9 km走り、浜大津の先の標識を左折、

**【第十四番 長等山（カガヤシ）園城寺 通称・三井寺】**（上左図）の大駐車場に入る。

この寺の寺域は大きく、西国札所の中でも奈良・興福寺に次ぐ大寺である。昔、僧兵をやしなっていた寺歴も、興福寺におとらない。

札所である観音堂も寺域の南の端に離れて建っていて、寺全体の中心ではない点も興福寺の南円堂（第九番）に似ている。

4時をかなり回っていたので、先ず観音堂に直行し、礼拝、納経を済ませる。（西国では無いが納経が4時半迄と言うところがあって困ったことがあった）

観音堂前の展望台からは琵琶湖が一望のうちに眺められ、その景観は素晴らしい。鐘の音が聞こえてきた。「三井寺の晩鐘」か？

帰りにその鐘楼に寄ってみる。そのそばに金堂（国宝）がある。均整のとれた軒の出の深い美しい建築である。中は、祭壇のまわりを回って多くの仏像が安置されていて、雰囲気もよろしい。

駐車場に戻り、係りの人に今晚の宿を紹介して貰う。

「植木屋」の電話番号を教えて貰い、予約出来た。この旅館は上述の観音堂から、石段を下りるとすぐのところにある。しかし駐車場からは道がわかりにくく、やっとたどり着く。旅館の女将が心配して旅館の前に出ていた。

予約が遅いので、夕食は外で取らなければならない。女将の推薦で行った店が休みで、適当な店に入る。一寸「山本富士子」に似た女の子が居たのは良かったが、味、サービスあまり感心した店ではなかった。

以上第一報終わり

敏翁

三月十四日

目を覚まし、宿の部屋（2階）の窓を開けると、空は快晴、左の方を見上げると岡の上に昨日訪れた観音寺前の展望台が青空の中に浮き出ており、下には長等神社の朱塗りの山門が朝日に輝いている（上右図）。実に気分爽快である。

朝食後、NHK・TVで「走らんか！」を見た後、女将に次の「元慶寺」への行き方を教えて貰い、9時ごろ出発。

教えて貰った道順は、旧国道1号線の「日の岡」から行くものだったが、新国道1号線から「旧」に入れず、そのまま走り「新」にもある「日の岡」信号で右折、約1kmの北花山信号を右折、やく50mの元慶寺入り口（おそろしく狭く要注意）を左折して寺の前の小さな駐車場につく。

VII. 元慶寺(番外)

【番外 華頂山 元慶寺(ガソクイ)】(上図)

この寺は、花山天皇が落飾した場所であることから、ゆかりの地として番外に取り入れられている。

伝説の域を出ないが、西国観音巡礼は、養老二年（718）、大和長谷寺の徳道上人によって、創設されたという。しかし盛んになったのは、これも確かな資料がある訳ではないが、花山法皇が永延二年（988）に巡拝されてからだという事になっている。

17歳で位につかれた花山天皇が、1年9カ月後最愛の弘徽殿女御の急逝に悲嘆にくれていた心理状態を悪用して、藤原兼家とその3男・道兼が「peten」にかけて落飾させたのが、この寺なのである。

その後、花山院は、相当荒れたらしい。杉本さんによると、「常に身近に、異様ななりをした悪僧どもを幾人も従え、通行人に喧嘩を吹きかけながら都大路を押し通ったり・・・」したらしい。

しかし、その後「みれん、執念、怨恨を克服して、専心、仏道修行にはげみ出したと思われる。三十三カ所巡礼の事績が、どこまで本当かは不明にしてもともかく野に伏し山に寝る苦行のなかに、真実、人間性の確立をめざして、法皇が脱皮していったことは想像にかたくない」

確かに、西国巡礼・中興の祖として、ネーム・バリュウと言い、人間ドラマの波乱万丈さと言い、申し分の無い

ものである。

法皇は寛弘5年41歳で崩ぜられ、杉本さんによると、「紙屋川の川上、法音寺の北山に葬られた」とあるが、地図でも見つけることが出来なかった。



寺は、昔は大きかったが、今は実に小さい。この寺の開山は、百人一首の

「天津風 雲のかよい路 ふきとじよ 乙女の姿 しばしとどめん」

の作者として有名な遍昭僧正である。その墓が寺から2～300m離れた所にあると知り、訪れる。(左図)

## VIII. 今熊野(第十五番)・鳥戸野陵

国道1号線に戻り、東山五条を左折東大路通を約1.5km南下、泉涌寺道の信号を左折、広大な泉涌寺の寺域に入る。現在は泉涌寺の塔頭の一つになっている

【第十五番 新那智山 観音寺 通称・今熊野】の駐車場に入る。

この寺の創建は古く、弘仁年間(825年頃)弘法大師による。その後、永暦元年(1160)後白河法皇が、山麓に熊野権現を勧請されたときに、当寺をその本地堂とされ、上記の山号を称し、この地を「今熊野」と名付けられたので、一般に「今熊野観音寺」と呼ばれるようになった。

上記熊野権現は、現在バス通りを隔ててある「新熊野神社」であろう。



今熊野の拝礼、納経を済ませた後、泉涌寺の寺域を車で回ってみたが実に広い。その中で、杉本さんの薦めに従って、中宮・定子の陵に詣でることにした。どこにもそれらしい標識が見あたらない。1/1万の地図で見ると、泉涌寺霊園のあたりから行けそうに思え、それらしき標識に従い霊園の駐車場らしいところに車を止める。霊園で工事をしていた親方らしい人に尋ねる。陵については、知らなかったが、古い島津家の墓などがある場所を教えて

くれる。これは、杉本さんによると、島津義久の逆修塔であり、この他藤原忠通、慈円大僧正、御子左長家の墓の三基の石塔がある。しかし、それ以外は新しい墓地になっている。そこで行き止まりの様子なので、たまたまお参りされていた年輩の方に尋ねる。その方は、自信は無いがと言いながら、そこから藪の中に消えかかっているような「落ち葉の踏み分け」を指さし、そこを進めば有るかも知れないと教えてくれた。

その通りしばらく進むと鳥戸野陵の右側に着いた。低い鉄柵があり鍵がかかっていたが、隙間から入り混み、正面に立つことが出来た。【一条天皇皇后定子 鳥戸野陵】である。(上図)

市街地を見下ろす高台の一角にあり、私一人のほかは誰も見えず、ただ木枝を渡る風の音だけが響いていた。

この陵には、他に醍醐天皇皇后穩子火葬塚など五つの火葬塚が併葬されている。御陵正面には、大きな丸石の敷き詰められた立派な道が付いていて、御陵の左側にも階段の付いた道がある。私の通って来た道は一番ランクの低いものの様にも思えるが、杉本さんもこの道を通って来ている。尚杉本さんの本で一寸気になるのは、「鳥辺野陵」とされていることである。

定子中宮は関白藤原道隆の娘で、清少納言の女主人にあたる。正暦元年15歳で、4歳年下の一条天皇のもとに入内し、女御から中宮に冊立されいいる。

しかし定子は幸せ薄い女性であった。20歳の夏、父をうしない、権力は道長に移り、やがて道長の娘・彰子が定子を押しのけて中宮の座に着く。

天皇の愛は変わらなかったようだが、定子は第二皇女を産んだのが原因で25歳ではかない生涯をとじているのである。

清少納言は、この不幸な女主人につかえ、才知のかぎりをつくしてその鬱屈を払おうとしているけなげさが「枕の草紙」に読みとれる。

定子の死後、清少納言は、御陵のふもとである亡き父元輔の月の輪山荘でその晩年をすごしている。

第十六番から十九番までは京都市街地の中にあり、今までにも何回か行ったことがあり、又駐車が困難な場所が多いので今回はパスすることにした。ここには、その名前のみを以下に記す。

- |      |      |              |                    |
|------|------|--------------|--------------------|
| 第十六番 | 音羽山  | 清水寺          | 清水の舞台で有名           |
| 第十七番 | 補陀洛山 | 六波羅密寺        | 開基は空也上人            |
| 第十八番 | 紫雲山  | 頂法寺 通称・六角堂   | 京の中心「へそ」で有名        |
| 第十九番 | 霊ゆう山 | 革堂(コトナリ) 行願寺 | 「ゆう」はJIS 第2水準にも無い字 |



## IX. 善峰寺(第二十番)

それで、第二十番に向かうことにした。

国道1号線に戻り西進、そのまま9号線に続く。沓掛で左折するつもりだったが、しばらく行ってもそれらしいところが無く、心配になり、道ばたの小さな食堂に入り、昼食を取る。道を尋ねると、30mばかり戻ったところがその交差点だった。

そこからは、道はかなり複雑ではあるが、標識がしっかりしていて、容易に

**【第二十番 西山（ヒザン） 善峰寺（ヨミネノ） 通称・よしみねさん】**（上左図）

に到着できた。途中は竹林の多いところで、竹細工の土産物屋などもあり、巡礼姿の客が群がっているなどは、この地域独特の風情である。

この寺は、境内地3万坪、全体が回遊式庭園の様になっており、見晴らしに立てば、眼下に京都市街が広がる。実に楽しい寺である。

本堂で、拝礼、納経後、側の石段を登ると「遊龍の松」（天然記念物）（上右図）がある。高さは2mも無いのに、全長は40mもある五葉の松である。寺では「日本一の松」と自慢している。この松のため、「松の寺」とも呼ばれているらしい。桂昌院のお手植えと伝えられている。

この寺は、かつては僧坊52の多きに及んだのであるが、応仁の乱に焦土と化している。

それを、本堂はもちろんの事、鐘楼、護摩堂、薬師堂等、山内の主な建物はおおむね桂昌院によつて元禄年間再建されたのである。

徳川将軍綱吉の母である桂昌院は、京都堀川通りの仁左衛門という八百屋の娘であつた。桂昌院の献歌と称するものに

「たらちねの 願いをこめし 寺なれば 我も忘れじ 南無薬師仏」

というのがあり、善峰寺には、仁左衛門夫婦がたびたび参詣していたのであろう。桂昌院、綱吉（＝犬公方）などについては、去年NHKのTV「吉宗」で詳しくやっていたので省略する。

宝永二年79歳で大往生をとげた桂昌院の骨は、徳川家の廟所である芝の増上寺に納められているが、この寺にも、彼女の遺髪を埋めた墓が建っている。実に見晴らしの良いところにある。そのすぐ隣下にある宝篋印塔は鎌倉時代のもので慈鎮和尚、伝教大師筆の法華経を収めたものだそうだがその形は無類に美しい。かつては、この塔が墓の所に建っていたのだが、大パトロンへの感謝の意が強すぎたのか、当時の門跡が塔をとりのけて、かわりに墓を据えてしまったのだそうである。

## X. 穴太寺(第二十一番)

沓掛へ戻り、9号線をさらに西進、約11km走ったところで、左折しなければならぬのだが、又解らなくなりガソリン・スタンドに飛び込んで聞く。親切に教えてくれる。その通りに走り、

**【第二十一番 菩提山 穴太寺（アナジ）】** の駐車場に入る。

寺は亀岡市のはずれ田園の中にある。

亀岡といえば、明智光秀の居城のあったところ。天正十年6月1日夜半、毛利攻めの令をうけて兵を亀山城中に結集した光秀はとつじょ兵を東に転じて洛中に殺到、主君信長を本能寺に討つたのである。

気になったのが、いたるところにある「梅鉢」の紋、本堂でお参りをするとご神体(?)に鏡が据えて有る。

納経所で聞いてみると、この寺は、神仏混淆の状態が今でもかなり残っているのだそうである。「梅鉢」は垂迹神が天神様である事を示している。いまでも境内の隅にお祀りしてあるそうである。

ときどき、参詣者（多分本当の仏教信者なのだろう）から、おかしい、取り外すべきである（特に鏡が問題だろう）と言われることがあるそうである。

私は、「神も仏も結局は同じものでしょうから良いのではないですか」と申し上げておいた。

ここで午後3時を回っている。今回の巡拝はこの辺で打ち止めにして帰ることにする。（実は明日は早起きして千葉方面へゴルフに行かねばならない。）

西国三十三カ所を2日回った印象は、はじめに想像していた以上に、寺寺が歴史の表舞台・主役に密接に繋がっている点である。

その歴史を深く知れば知るほど、巡拝の味わいが深くなるのではないかと思う。その点で、私みたいな不勉強者には、杉本さんの本は本当に有り難かった。

あと2～3回ぐらいに分けて全体を回る積もりであるが、その時も又杉本さんの本と同行する事にしたいと思う。

完

敏翁